
Holmes × Holmes

積み木 ウサ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H o l m e s x H o l m e s

【Nコード】

N 3 5 5 1 E

【作者名】

積み木 ウサ子

【あらすじ】

- 私立豊穰学園 - 大規模な教育施設。この学園で最近、奇妙な噂が流れ出した。「ナコさん。願いを叶えてくれるおまじない...」それと同時に次々と奇怪な事件が起こり始める。これを聞いた瑞之江一也、率いる生徒会は事件の真相を解き明かそうとするが...

00・The beginning―発端―(前書き)

初投稿です。

まだまだ新米ですが、一生懸命書くのでぜひ読んでください。(^

0 ^)

00・The beginning―発端―

「私は・・・私は間違っていない！」

と、その少女は叫ぶように言った。

「間違っているのはあなたたちよ！」

そして、激しく体を震わせると、大きく息を吸い込みーそれからふと微笑んだ。

『さよなら・・・ナツミ・・・』

風の音でかき消されるほどの微かな声で呟いた。

悲壮と愛情のこもった美しい声で。

それから硝子が割れるように体を崩し、壊れた人形のように瞳を閉じた。

「畜生！」

と、彼は言った。「あいつのせいだ！」

少女は死んだのだ。

その口元から見て、麻薬か何か・・・毒性のある薬品を飲んだのだろつ。

青白いほほに真っ赤な血の泡が滴っている。

「畜生！」

震える体で少年は少女を抱きしめた。

ゴムのようにだらんと垂れた冷えた体をできるだけ強く……強く……

1975年 09月 09日

清穰学園高等部二年

朝倉奈々子死亡。

死亡推定時刻 午後3時58分。

死因 青酸カリによる急性中毒。

.....

・ ・ ・ ・ ・ 発見者 赤島健氏
清穰学園高等部二年

01・Opening-始まりのゲンイン-（前書き）

第二話ですっ（＾Ｏ＾）
しいです

楽しんでいただければ嬉

01・Opening 始まりのゲンインー

1

浅黒い肌の少年が広い額に汗を流し、つたつたと歩いて行く。

その堂々とした出で立ちは見るものに恐怖と威厳を与え、そしてどこか人懐っこい印象だ。

そして、その後ろを

色黒の少年と似たような顔つきで白い野球ユニフォームを着た少年と、制服を纏い（まとい）、狐のような顔をした少年がぴったりと歩幅を合わせ、歩いて行く。

ここは私立豊穰学園。

小等部から大学院まで成る大規模な教育施設だ。

その学園の廊下を彼ら三人は歩いていた。

ガラッ。

先頭の少年が

「生徒会室」と書かれた扉を開けた。端正な装飾の施された重々しい扉だった。

2

「おい！生徒会長！」

押しの強そうな太い声で彼は言った。

「……………」

ドアを開けるときはノックと名乗り。そして返事を聞いてから中に入る。小学校で習いませんでした？野球部部长 岡崎透さん。今は会議中です。それと生憎、僕は生徒会長という名前ではありません、瑞之江一也です。」

透き通った低い声で

「生徒会長」と呼ばれた少年が答えた。長い机の前方に20人程度の生徒を従えて座っている。長めの黒髪に、整った顔立ちの美しい少年だった。

「細かいことはどうでもいいんだ。今はそんな些細なことを言っている場合じゃない。写真だ。」

「岡崎透」と呼ばれた少年はそこで言葉をぐいっと区切り、砂ぼこりの付いたユニフォームから一枚の写真を取り出した。

「それは？」

瑞之江一也が席を立った。それと同時に生徒会役員に一声かけた。瑞之江に続き4人の生徒が席を立つ。

「部員が部室で見つけたんだ。さっき俺のところを持ってきた。これはあんに渡したほうがいいと思って葛西とここに来たんだ。」

岡崎は苦々しそくに写真を見つめ、助けを求めるように瑞之江を見た。

瑞之江はそれを受けると同じく苦い顔をして、写真を見つめた。

「……」

「また」ですか……」

その美しい顔を歪めながら彼は言った。

「日にちと時刻、発見者及びその場にいた生徒、教師名、それと写真に触った生徒を調べて頂けますか。」

葛西先輩には副部長として詳しくお話を伺いたいので、ここに残っていただきます。」

それと各委員長の皆さん。今日は会議を中止します。また、後日「イタズラ」についてご説明をさせて頂きますので、歯切れの悪い終わり方ですが、各委員会嚴重注意を呼び掛けてください。よろしくお願いします。では、解散。」

瑞之江は迅速に指示を出し、その場にいた生徒はその指示に従った。

あとには瑞之江を含む生徒会役員、岡崎を含む3人が残った。

01・Opening 始まりのゲインシー（後書き）

どうだったでしょうか？

今回は原因をテーマに書いてみました

（*^^*）

感想&mp・評価お待ちしております

02・KEYI 告げられるカギー（前書き）

はい！

三話です（＾Ｏ＾）

これはまだ本文には関係ありませんが、あとあと重要になるんです

02・KeyI 告げられるカギ

『…ねえ…知ってる?…』

体育館の裏の裏、生徒に

「抜け道」と呼ばれている通り道で私はA子に呼び止められた。

「え?」

部活の休憩時間にコンビニに行こうと思っていたときのことだった。

「ねえ…知ってる?」

A子はにこにこしながら唇に人差し指を添えた。

その姿は子供がそつと秘密を明かすような無邪気なものだった。

「何を?」

私が問いかけると、微かに赤いマニキュアを付けた指が乳白色の肌から離れ、私の胸を指差した。

「…ココロの願い…叶えるおまじない」

「…え?」

「ココロに秘めた願いが叶うの。秘密のおまじないなんだよ」

ふふとA子は笑って、愉しそうに話し出した。

「あのね、バレー部の先輩から聞いたんだけどね、豊穰学園にはナコさんっていう女の子がいるんだって。カミサマ…みたいなものかなあ。でね、ナコさんは選ばれた年に選ばれた生徒の願いを叶えてくれるんだって。それでね、今年がその選ばれた年なんだって。ナコさんに願いを叶えてもらえるの。」

ここまで話してA子は面白いでしょ？と言いなから、軽く笑った。ちよっとしたネタとして話しているようだった。きっと私がこのようなおまじない話が好きだから、話しているのだろう。

「それで？」

「うん。ナコさんに願いを叶えてもらうには条件が必要なの。まずはね、ナコさんから校章を受け取らないといけないの。」

・コウシヨウ…？・

「コウシヨウってこれ？」

私が制服の胸元を指差すとA子はこくと頷いた。

「うん、それだよ。」

でも、ナコさんの学校の校章のワッペンを受け取らないといけないんだって。それは誰にでもくれるわけじゃなくて選ばれた生徒だけに渡されるんだって。つまりワッペンが選ばれた証拠なの。」

ワッペンが

…選ばれた証拠…

ちょっと怖いけど、ワッペンが欲しいかも。

願い…叶えたい…

「あ、あと約束が6つあるの。」

「約束？」

A子はまたこくと頷いて、声を落とした。
そして詠うように話してくれた。

「ひとつ 見せてはならぬ知らぬ者には
ふたつ 告げてはならぬ
得たことを

みつつ 肩身離さず持ち続けよ

よつつ 8日の子の刻

願いを込めて封をとぢよ

いつつ 9日の馬の刻

選ばれしものに封をとぢてそつとわたせ

むつつ そなたが選びし者に儀式後、話を告げよ」

それは

「いろはうた」のような謎めいたものだったが、なんとなく意味を

理解することができた。

「つまりワツペンを手に入れたのね？」

A子は照れながら、頷き、

「私はあなたを選んだのよ」と言った。

「あなたも選ばれるかもしれない。そしたら叶えてね、ココロの願い」

笑顔でそう言うと体育館にゆっくりと戻って行った。まるで重要な役目を果たしたような晴れ晴れしい姿で。

・・・ナコさんねえ・・・

本当にあるのだろうか？

そんな可笑しなこと。

もしも……

もしもあるとしたら……

私は……

「…………ごめん!」

「え?」

体育館に戻ったはずのA子が焦った顔をして、
走って戻って来た。

「ごめん…わす…れてた…」

彼女にしては珍しく、荒い呼吸をしてせえせえ言いながら私を見つめた。

「ナコさん…には…もうひとつ話があつて…約束…を守らなかつた人にはナコさんの征伐が下るんだって…命を…持ってかれちゃうの…」

「…………イノチヲモツテカレル…………」

「…それって…」

私の体が小刻みに震える。手には微かに冷たい汗をかいていた。

「そう……死ぬ……ってこと」

息を整えたA子が冷めた瞳をして呟いた…

02・KEYI 告げられるカギー (後書き)

どうだったでしょうか？ 四話からは本文に戻ります (^ ^) 感想&mp;評価お待ちしております！

03・RUMORー少女のカゲー（前書き）

四話ですー今回はちょっとオカルトチックだから、なんか書いてて怖いです（笑）

03・RUMORー少女のカゲー

3

「……さて……」

瑞之江が静かになった教室をゆつくりと見回した。
それから残った面々の顔を眺めた。

「これから今、校内で起きている陰湿なイタズラについて、岡崎先輩、葛西先輩、それから柳川先輩にご説明いたします。先輩方へのイタズラについて理解して頂かない限り、生徒会で指示を出すことは不可能です。ですから、きちんと聞いて頂きたい。」

そこで瑞之江は話を句切り、三人の瞳を鋭い眼差しで睨み付けた。
まるで獲物を狙う野獣のように。

「いいですね？」

暗黙の了解……

三人は深く頷いた。

「では、あちらの席についてください。
それと…柳川先輩、先輩はどのような経緯でここに來れたのですか？」

「柳川」と呼ばれた狐顔の少年はビクツと背筋を振るわせると、青い顔をして瑞之江を見つめた。それから絞り出すような声でぽつりと呟いた。

「…かつ…かなこを…海南子を助けてほしい!!」

それからキツと顔をあげ、瑞之江の襟元をぐつと掴んだ。

「お願いだっ！海南子を助けてくれ!!」

背の高い柳川に首を掴まれ、さすがの瑞之江も啞然とし、代わりに副会長の
長篠 ながしの 紘治 こうじ が柳川を諭し、書記の文無月 ふなつき 綾乃 あやの が彼を椅子に座らせた。

「柳川先輩、落ち着いてください。瑞之江を掴んだって私たちはあなたに何もしてあげられませんから」

綾乃がゆっくりと彼を落ち着かせる。

「何があったんですか？ゆっくりでいいので、すべて話してください。話を聞けばお役にたてると思います。」

綾乃はにこつと笑い、柳川の隣に腰かけた。彼女は茶色がかったセミロングの髪を垂らした優しそうな印象の少女だった。

「…たんだ…」

「え？」

唇を血が滲むほど、強く噛みしめ、
震える拳を机に携えながら柳川は押し殺した声で話し出した。その
瞳は怒りで満ち溢れ、何か強い光を宿していた。

「来たんだ…海南子のところに…：ワッペンが…」

「ワッペン…？」

綾乃の斜め後ろに立っていた会計の近藤 里奈が訝しげに眉をひそめた。ストレートの黒髪がよく似合う大人びた感じの少女だった。里奈は綾乃と顔を見合せ、記憶を手繰りよせるように瞳を閉じた。二人の顔にはなぜか恐怖が浮かび、凍りついたような顔をした。状況を掴めていない男子陣はきよんとしていた。

「先輩、それは噂になっている…：ナコさん…：ですか？」

戸惑いを浮かべた声で、

綾乃が思いきったように柳川に聞いた。柳川は溜め息をつくように
な声で

「ああ…」と頷いた。

4

「ナコさん。って言うのはね、女子の中で流行ってるおまじないみたいなものなの」

瑞之江に促されて里奈と綾乃が話し出した。

「いつから流行りだしたのかは解らないけれど、たぶん女子の七割は知っているはず。特に高等部、中等部の女子は知らない方が可笑しいと思う。」

里奈は宙に瞳を泳がせ、それから綾乃に軽く目配せをした。綾乃が先を進める。

「ナコさんは、豊穰学園の生徒で学校が大好きな女の子なんだってでも、体が弱くて保健室によく通っていて、友達やクラスメイト、先生にお世話になってたんだって。でね、ナコさんはみんなに助けてもらった恩を返すように、選ばれた年に選ばれた生徒の願いを叶えてくれるんだって。」

「つまりコツクリさんみたいなものか…？」

瑞之江が腕を組みながら言った。

「それって危なくね？」

瑞之江と長篠が顔を見合せた。『危ねえーよ』という顔をしている。綾乃は困ったように話を続けた。

「…うーん…どーなんだろう？なんかコツクリさんって言うより女子の神様…みたいに言ってたけど。」

「神様？」

「うん。誰に聞いてもそーゆーの。『願いを叶えてくれる、神様なんだよ』って。あと、ナコさんの生死は解らないみたい」

「？」

「話さないの、誰も。ナコさんが生存者なのか、死者なのか。ほら、こーゆー話しには必ず『事故死した』とか、『学校を恨んでいた』とか、死を表す言葉がつくでしょう？」

ナコさんにはないのそーゆーお決まりの話が。最初はあたしがたまに聞いてないだけって思ったんだけど、違うみたい。誰も話さないから。」

里奈も頷いた。

「先輩が『それは禁句だよ？』って言ってた」

瑞之江が頭を捻る。

長篠は考え込み、柳川は苦々しそうに顔を歪め、岡崎と葛西は面白そうに聞いていた。

「つまりナコさんは…生きていて、俺らと同じように学園で生活している…？」驚いた顔で長篠が言った。

「うん。コージの言う通り。誰かが…誰か生徒が何か目的を持ってやっているのかも。」

「生徒以外。って可能性もあるわ」

里奈が呟いた。

「一部ではナコさんは『先生で…』と話されてるらしいから。」

全員が啞然とした。

綾乃も初めて聞くようで、驚いていた。

特定することのできない霧のように儚く、闇のように深い人間がいる…学園で何か工作をしている可能性がある…恐怖を与えるには十分な種だった。

「特定不可能…ってやつか。それはちょっとヤバイかもな」

瑞之江が沈黙を破った。

「ナコさんが何をしてるか知らねえーが広まるのはヤバイ。集団の中じゃなにが起こるか解らねえし、悪意を持った人間がやっていることなら、何か危険に巻き込まれる可能性もある。」

「どーするの？」

綾乃が不安げに呟いた。

「調べるさ。学校で起きているイタズラと絡めてな」

03・RUMORー少女のカゲー（後書き）

どうだったでしょうか？ とつとつ瑞之江が動き出しましたあ（＾
）
感想&mp;評価お待ちしております

04・EXPLANATIONーカードウ中ー(前書き)

前회가長かったので、今回は短くしてみました(^^ゞ

その後の動きは早かった。

ナコさんについて、詳しく柳川から話を聞き、岡崎に写真について調べさせ、

学園で起きているイタズラを三人に長篠と里奈が説明した。

その間に瑞之江と綾乃は、

今まで起きたイタズラと写真を見比べ、ナコさんについて情報を得るため、何人もの女生徒に話を聞いた。

彼らが各自活動を行っているうちに柳川の話、そして学園で起きたイタズラについて少しお話ししようと思う。今後、重要なキーポイントになるのでよく聞いて頂きたい。

まず、柳川の話。

先ほど冒頭でお話したように、

「海南子」こと堀川海南子にナコさんから、校章のワッペンが届けられた。

これはナコさん選ばれた者に送られるもので、受け取った人間はナコさんに願いを叶えてもらえるらしい。

だが、このワッペンには、いくつかの決まり（ルール）があり、海南子はそのなかのひとつ、「受けとるときに人に見られてはいけない」というものを破ってしました。

それからというものの海南子は怯えて、学園の寮に籠るようになった。柳川は海南子の怯え方に心配し、助けを求めて生徒会に出向いたらしい。

柳川によれば、海南子はもう、一週間もまともに学園に来ていないそうだ。柳川は寂しそうに話していた。

ちなみに海南子と柳川は美術部に所属し、仲が良かった。そのため海南子は柳川にナコさんについて相談したそうだ。

だから、柳川はナコさんについて知ったらしい。

続いて学園で起きているイタズラについて。

瑞之江の説明によると、

ここ二週間、正体不明の奇怪な写真が出回っている。誰がどのような目的で行っているのかは不明で生徒会の頭を悩ませているようだ。そのため生徒会では、教師、専門委員会、部活を媒体にし、注意を呼び掛けていた。ところで、その写真、どのような物なのか気になる方もいらっしやるだろう。

現物をお見せすることが

できないため、これについても軽く説明させて頂こう。

この写真には三つの特徴がある。

一つめは撮影された場所。

どの写真にも必ず校舎が写っているのだ。

詳しく言わせて貰えば、

必ず高等部校舎。

二つめは写っている人物。

髪の毛の長い少女が豊穡学園の制服を着て、後ろ向きに写っている。

三つめは写真に書かれた文字。

赤いペンやマーカー…とにかく赤いものでアルファベットが一つ書かれているのだ。

ちなみに、アルファベットは写真によって異なり、規則性は見当たらなかった。

これらが写真の特徴である。生徒会ではこれを元に詳しく作成した者を調べている。

さて、私による説明は以上で終了とさせて頂こう。

舞台を豊穡学園に戻し、新たな展開をお見せしなければ…

04・Explanationーカッドウ中ー(後書き)

今回はちょっととした説明でした(∧o∧)v次回からまた、瑞之江
たちにカッドウして頂きます 感想&・評価などあったら、
お待ちしております

05・C1UE1進まないソウサー（前書き）

久々の更新です（^^）そのためとても長いです…誤字脱字も多いかも…甘めに見てやってください。

05・CLUEー進まないソウサー

5

「あゝあー…ワケわかんねえー」

一人の少年がぐったりと体を倒し、悪態をついていた。

「まあ、しょうがないよ…女子って変に口固いところあるから」

その横には苦笑いを浮かべた少女が座っている。

「なあーにが『男子禁制』だつっうーのッ。おまえらのせいどころちはずまんねえーこと調べてんのによお…」

ここは豊穰学園高等部カフェテラス。

そこで瑞之江と綾乃が何やら疲れた顔をして、腰掛けていた。

2人の前には入れたての

コーヒーとクッキーがひっそりと置かれている。

「瑞之江がいるから…ってみんなに断られちゃったもんね…」

この2人先ほどまで、

諸活動をしている女生徒を回って、話を聞こうとしていた。

それはナコさんについて

少しでも情報を集めるためであり、今回の柳川の依頼を調べるためであった。

ところが、

女生徒は誰1人として、ナコさんについて語らなかった。皆決まって瑞之江を見て口を閉じるのだ。

『瑞之江クンも聞くの?』

『あやちゃんだけじゃダメ?』

『生徒会室で話す?!ゴメン…話せないや…』

理由は一つ。

…『ナコさんは男子禁制だから…』…

女生徒は顔を曇らせて呟くのだった。何か暗い影を抱えて。

『あのね、
ナコさんのこと男子に話して学校に来れなくなっちゃった子がいる
んだって…』

『その女子引きこもっちゃってマジヤバイらしいの…』

『…だからナコさんは男子に教えちゃダメだって…』

そう。

いつの間にか海南子のことが、噂になっていたのだ。
それも海南子の話を元にして、ナコさんのルールがまた1つ作られていた。

「夕チ悪りいよなー…」

「うん」

「誰か止めるよな」

「うん」

「楽しいかねえー？ナコさんに束縛されて」

「……………」

「理不尽だとか、可笑しいとか思わねえーのか？」

「……………」

「人を…友達を傷つけるとか、考えねえーのかよ……………」

「……………きつと……………」

瑞之江から顔をそらし、
湯気の立つコーヒーを見ながら、綾乃は言った。

「怖いんだよ……………回りの視線が……………。話したことがバレてハブられるのが……………」

拳を握りしめて、悔しそうに話した。

「怖い。女子は深いから。ハブられたら、もう終わりだから……………だから……………みんな話せない。やってる人間を知ってても、潰すことができない。……………弱……………い……………から……………」

それから少し黙った。
瞳はコーヒーに注がれたままだった。

「……だけど……だけどさあー……」

少しして綾乃がまた口を開いた。瑞之江はじっと耳を澄ませている。

「？」

湯気の白い壁の向こうから弱々しく、だが凜とした、強い声が聞こえた。

「ダメって言わなきゃいけないよね、歯止めかけなきゃダメだよね……」

堰を切ったように、一気に話して、瑞之江の瞳を真っ直ぐに見つめた。

「…変？」

そんな綾乃を一瞥^{いちへつ}して、瑞之江はフツとため息をついた。

「弱い…か…。」

真っ黒なコーヒーにミルクを垂らしながら、

「強いヤツもいるみたいだけどな」

と言つて微笑んだ。

6

「…というわけです。」

瑞之江と綾乃が一休みしている間に、生徒会室では長篠と里奈が学園で起きたイタズラについて、岡崎率いる3人に説明をしていた。

「つまり…うちに来た写真はイタズラの一部ってことか…？」

腕を組み、眉間に皺を寄せた岡崎が何やら納得のつかない顔をして、長篠に問いかけた。

「ええ。こちらではそのように考えています。」

長篠は率直に答えた。

「だけど…なんでうちに…？」

葛西も納得がいていないようだ。岡崎と顔を見合わせている。

「それが…分からないんです。」

今までずっと黙っていた

生徒会補佐の日下部陽二くまかがポツリと呟いた。

「僕は今まで先輩方に依頼されて、何度も写真を見てきました。もちろん受け取られた方のデータも。だけど、何も分からないんです。受け取られた方は特定された人間でもなく、法則があるわけでもない。真っ白なんです。」

日下部は天然パーマの髪をふわふわさせながら、困ったように視線を泳がせた。

小柄でどこかあどけない顔をした少年だった。

「あ………すみません！言い訳がましいことを言って…」

そう言っつて肩を落とし、ガツクリと腰を下ろした。どうやら今回の件でかなりのダメージを受けているらしい。

「よーちゃん、大丈夫だよ。」

すかさず里奈がフォローした。

「よーちゃんは一生懸命やってたから。」

理奈は微笑を浮かべていた。

日下部はそれを見て、安心したのか、こくと軽く頷いた。

日下部は生徒会役員で最年少だ。だから、どこか危なっかしく、傷つきやすい。

ちなみに豊穰学園の生徒会役員は生徒会補佐、小等部を除き、どの部も2年生で構成されている。

つまり日下部以外の3人は高等部2年。日下部は1年代表として選ばれた大物だったりするのだ。

「彼の言っていることは、間違っていないせん。」

理奈と日下部を引き継いで長篠が話しを続けた。

「僕たち2年も日下部と一緒に何度か写真を見ました。ですが、何一つ見つけられませんでした。それどころか、途中で投げ出してしまったぐらいです。」

「…マジかよっ…」

ますます深く眉間に皺を寄せて、岡崎がぼやいた。
葛西も横で唸っている。

「特徴とかは？何か写真に必ず映っているものとか、渡された時刻の統一性とか…」

ついさっきまで混乱して、喚き（わめき）散らしていた柳川が、今度は一番冷静に話を進めた。今までの話を聞いても、全く驚かず、むしろ納得したように頷いた。

「特徴…ですか？」

日下部が席を立ち、近くに置いてあった細長い棚から、クリアファイルを取り出した。

「えっと…あつたんですよ…先輩の言う通り特徴が何個か…なんだっけ…」

クリアファイルをパラパラと捲り、素早く文字に瞳を走らせる。

「えーっと……」

クリアファイルにはたくさんさんの細かな文字がところ狭しと羅列されており、読むのにも必死だ。

「……うーん……」

次のページをまた捲る。

「………違うなあ………」

そしてまた次のページ。

「絶対、あつただけだなあ………」

ファイルの量は半分ぐらいになっていた。

「……んー……………」

長篠たちは静かに日下部を見守る。ただ葛西はじれったそうに舌打ちをした。

「ここかなあ……」

不安げな顔をしてまたページを捲る。

「……………ん……………?」

10分ぐらい経っただろうか……

日下部がふと手を止めて、必死にそのページを読み始めた。

「……………あつ……！先輩！ありましたっ！これですっ！写真の特徴で

すっ！」

それを聞いた一同ははホツとしたように息を吐いた。長篠は疲れたような笑みを浮かべて、クリアファイルを受け取った。

05・C1UEE進まないソウサー（後書き）

いやぁ…書いててこんがらがるぐらいキャラを多くし過ぎました（苦笑）頑張ります（^^）d評価&感想などありましたら、よろしくお願いします。

06・it came off 寄りミチー（前書き）

六話です（＾Ｏ＾）また長いです（笑）

7

「日下部、簡単に説明してもらってもいい？」

長篠がファイルを読みつつ、日下部に目を向ける。

「はいっ。ホワイトボードに書きますね」

指示を受けた日下部はさらさらと黒板に文字を綴る。

「特徴：しっかり教えてもらわないとね……」

柳川が1人、呟いた。

8

「で、どーすんべ？」

「うーん……別行動とろっか？」

……つかの間の休息。……

瑞之江と綾乃はコーヒを飲み終わると、すぐにカフェテラスを立ち、北校舎に向かった。

北校舎は別名、『文化部棟』と呼ばれており、その名の通り多くの文化部が活動している。

女子の比率が非常に高いのでも有名だ。

従って、2人は『噂を聞きやすい』と考え、ここに来たのだ。

補足をさせて頂くと、豊穰学園には北校舎、東校舎、西校舎、南校舎がある。

北校舎、東校舎は主に部活動及び委員会活動の校舎で各学年合同で使用している。

逆に南校舎、西校舎は各学年ごとに別れており、授業用に使用されている。

ちなみに、生徒会室は東校舎の四階の一番端にある。

「…そーだなっ…俺行っても意味ねえーし。文無月に任せるわ。俺は理事長んところに行くから、あとで落ち合おーぜ。連絡はmailで」

綾乃は苦笑し、

「わかった」と言って瑞之江と別れた。

9

「じゃあ、説明しますね」

ホワイトボードを背に、日下部が話し出した。

「始めにこの写真を見てください。これは先輩が受け取った写真と

よく似ています。」

ホワイトボードに二枚の写真が貼り出された。校舎をバックに背を向けたロングヘアの少女が写っている。そして、バラバラに1つアルファベットが赤で書かれていた。

「うーん…どこが？」

「似てなくね？」

里奈と岡崎が感想を述べる。

「校舎？」

「取り方？」

「文字の書き方かなあ？」

と長篠、葛西、柳川が考察した。

「確かにこの写真は別物に見えますよね。でも、長篠先輩たちの言う通り共通した箇所も多々あります。特に葛西先輩と柳川先輩の意見は的を付いています。」

「取り方と文字がか？」

長篠が驚いた顔で聞いた。

「はい。」

この二枚の写真、どちらも髪の毛が左になびいていますよね？草や

木も同じように左に。

そして、右に沈んでいく太陽が見えます。」

一同、頷く。

「写っている校舎も北校舎と一致していますし、時間帯も日の沈む5時頃と同じです。そして、極めつけは文字です。作成者は気づいてないようですが、二つの文字には微かにマニユキアの跡があります。」

「どうも?。」

里奈が写真を見つめる。

「同じです。」

日下部は写真の裏と文字のすぐ真下を指差した。

「よく見るとマニユキアとラメが微かに付着しているのが分かります。」

きつと作成者はマニユキアを弄りながら、もしくは溢した(こぼした)のに気づかずこの写真を作成したでしょう。

急いで作成したのでしょうかね。

文字の走り書きから見てもこれは正しいと思います。

よって、この二枚の写真は同一人物により、作成されたものと推理します。」

日下部はにこりと笑って話を締めた。

「すごい……」

里奈が感嘆の声を上げる。

「すごえーなっ一年っ」

「やるねえ……」

「頭いいなあ……」

つづいて岡崎、柳川、葛西と全員が納得したように見えたが……

「うーん……待て。」

長篠がストップをかけた。

「はい、先輩」

「水を差すようで悪りいんだけど、それって合わせようと思えば合わせられるよな？」

「……はい」

「んー……それだけじゃっば同一人物とは特定できねえーよ。」

済まなそうに言った。

「すげえー！！マジだっ」

「ほんとっだあ！先輩、すごいですっ」

確かに里奈が指差した先には二枚とも薬指が写っており、ほくろもきちんと写っていた。

「これで同一人物の証明がつくね」

笑顔で里奈が言う。

「ああ。この調子でいけば犯人分かるかもな！」

長篠も満面の笑み。

すべて丸く収まり、皆が安心したようだったが…

「……………ちょおーとっ待ったあ！」

柳川が声を上げた。

「話がずれたよ。特徴について、説明してくれよっ」

「あっ……………」

柳川の厳しい一言が話を振り出しに戻した。

06・it came offI寄りミチー（後書き）

寄り道し過ぎましたね（笑）次回からちゃんと進めます（笑）評価
& a m p・感想などありましたら、お願いします

07・PROCESSI 隠されたオモイ（前書き）

八話です。なんだか中途半端に終わってしまいました。（ - - ）
九話に続けるための話です。

07・Process I 隠されたオモイ

10

「ん…」

さてどうしたものか、瑞之江と別れてから綾乃はぼんやりと立ち尽くしていた。

「ん…」

目の前には北校舎。
部活動の賑やかな笑い声や、話声が聞こえてくる。

「ん…」

それでも尚、躊躇したように綾乃は北校舎を見つめている。

「…しょうがないか…」

数十分の後、綾乃は一人呟いた。そして北校舎に足を踏み入れた。

1 1

コンッ。

コンッ。

理事長室と書かれた大きな扉を瑞之江が叩いた。

「入りなさい。」

中から落ち着いた男性の声が聞こえた。瑞之江はそれを聞くと、「失礼します。瑞之江一也です。」と言って、理事長室に入っていた。

1 2

「…失礼します…」

北校舎に入った綾乃は美術室の前に立っていた。

「あれ…？綾乃？どーしたの…?!」

綾乃に気づいた一人の少女が驚いたように部屋の中から顔を覗かせる。

「生徒会のしごと…?」

またもう一人、小柄な少女が顔を出した。

「ああ…しごとじゃなくて、ちょっと遊びに来ちゃった。」

綾乃は二人の少女…

清水美智子と永池香織に微笑んだ。

「めずらしいー！！天変地異が起こるんじゃない?」

「それどころか、地球崩壊だよっ」

憎まれ口を叩く二人を綾乃は苦笑しながら見つめた。

そしておそおすと、

「中…入ってもいい?」

と問いただした。なぜかその瞳にはうつすらと不安の色が見えた。

13

「こんにちは、瑞之江君。今日はどうしたんだい?」

理事長室に入った瑞之江は理事長こと、細川文雄と向かいあって座っていた。

大きなソファ―に瑞之江は一人。だが怯えることも、恐れることもなく、堂々と座っている。

「はい、理事長。悪戯についてご報告に来ました」

しっかりとした口調で、だがどこか冷えた声で答えた。

「また何かあったんだね」

理事長は落ち着きを払っていたが、寂しそうな声で言った。

「豊穰学園はどうしてしまったのだろうかね…笑顔が溢れていると思っていたのだが…」

そして教卓から分厚いノートを取り出した。

「ゆっくりでいい。いつも通り明確に話して欲しい。私が悪戯を理解しない限り、どうすることもできないからな」

そして、万年筆を取り出し、ノートを開いた。

「もう二度と失敗は犯させない…」

ポタツ。

真っ黒なインクが零れた。理事長の瞳に鋭い光が走っていた。

07・PROCESSI 隠されたオモイ (後書き)

いやあー：かなり微妙ですね(笑)次回にちゃんと繋げないと思います。
I (^ | ^ ;) 頑張ります。感想&mp;評価よろしくお願いします。

08・AngerI 閉ざされたカコー（前書き）

久々です（^ - ^）今回は短めなので、すぐに読めちゃうと思います

08・AngerI閉ざされたカコー

14

美術室に入った綾乃はきよろきよろと辺りを見回した。

「……………」

絵の具、パレット、ビィーナス像…美術に関わるものがところ狭しと置かれている。その周りでは50程の部員が各自の彫刻や絵画を優雅に、そして楽しみに仕上げている。

綾乃は目を凝らし、ゆっくりと部員の顔を伺った。清水美智子の背に隠れ、部員に顔を伺われないようにして、じっくりと1人1人の顔を眺めていく。

それはまるで細かなパズルを組み立てるようだった。

「……………いない……………んだね……………」

部員全員の顔を穴があく程眺めてから、ぼそりと呟いた。

「え……………」

「…美葉先輩…辞めたの？」

どこか怒りの籠った（こもった）声で、ジッと一つのパレットを見つめる。

「ああー美葉先輩？あや、仲良かったもんね。今は受験対策の補講で部活にはほとんど参加されてないよ」

美智子はパレットの絵の具を洗い流しながら、思い出したように答えた。

美智子の手元からは赤や青…色とりどりの華がゆつたりと散って行く。

綾乃はその中に手を浸し、散り行く華をそっと掴んだ。不気味な色に化した華が白い腕を汚す。

「…仲良くなんかないっ。」

そして、美葉のパレットのすぐ側に飾られていた少年の肖像画に大きなばつを描いた。

「あやっ!?!?」

美しい少年の顔を不気味な液体が切り裂いた。肖像画は少しずつ色褪せていく。そして少年の瞳から大粒の涙のように、ポタリ。と絵の具が垂れた。

08・AngerI閉ざされたカコー（後書き）

綾乃についてこれから、いろいろと明らかになります。次回もぜひ読んでください。感想&mp;評価お待ちしています！

09・AngerI失われたタカラI(前書き)

やっと10話ですー(^ ^)ここまで長かった。いろいろと話が
それましたが、全て最後にまとめるので全部読んでいただけると嬉
しいです。

09・AngerI失われたタカラ

15

「何してんのっ!？」

おだやかな美術室に美智子の罵声が響く。彼女にしては珍しく大きな声をあげた。

それと同時に肖像画に駆け寄り、急いで液体を拭き取る。

紙が破れないように、少年の顔を壊さないようにゆっくりゆっくり丁寧に。

だが、無惨にも液体は速度をあげて滴り、美智子が拭き取るのと同じ時に少年の顔も崩れていく。

「……………あやの…なんで!？先輩、大事にしてたんだよ？なのになんで……………」

かすれた声で呟きながら、破れそうな絵を必死に元に戻そうとする。

「ねえ！答えてよっ…！」

だが綾乃は答えない。ただ溶けていく少年を眺めているだけ。その顔にはなんの感情もない。

「あやのっ!！」

美智子の声が寂しく響く。綾乃はただ静かに少年の最後を見守って

いた。

「……………どうしたの…?」

ふいに場違いな声が出た。

綾乃と入れ替わるように、職員室に行っていた永池香織が戻って来たのだ。

「あや…? みーちゃん…?」

状況が呑み込めないらしく、戸惑いを浮かべている。

「……………あやのが…先輩の肖像画を壊したの…」

ぼろぼろになった肖像画を美智子が指差す。

「あやのがやったの…」

「えっ」

香織の戸惑いに波紋が広がる。

「水をかけて、それで…」

今はもう紙切れのようになってしまった絵をそれでも美智子は拭き

続けた。

大事に…大事に…

肖像画を慈しむかのように。

「なんで…!」

理解出来ない!と言わんばかりに声を張り上げる。

「だってそれはあやが先輩のために描いたものでしょう!それなのに…」

力なく拳を握った。

失ったものを掴むように。二度と手に取れない宝を求めるように。

「ねえー…あやっ…先輩はあやが美術部を辞めてから、ずっとあやの肖像画を大事にしてたんだよ? あやが一生懸命描いてくれたからって。もぉーいないけど、それでも僕にとっではいるんだ、大事な絵なんだ。って。いつも悲しそうに笑って……なのになんで!？」

壊れた肖像画を掴み取る。

「見て!!あやが一生懸命描いた絵なんだよっ!!」

綾乃前に壊れた肖像画をかざした。

しっかりと瞳に映るように腕を伸ばして、ぎゅっと力を込めて。

「止めて」

今まで黙っていた綾乃が大声を張りあげた。そしてぐっと香織の腕を握り、肖像画を見えない位置に移動させる。それから、肖像画を取り上げた。

「なっ……」

香織が離れた肖像画はぱらりと落ちていく。

その肖像画を掴み取り、綾乃は一気にばらばらに切り刻んだ。

「……！！」

綾乃の突拍子もない行動に二人とも目を見張った。

ありえない……その言葉がぴったりと合う顔をしていた。

だが、当の本人は鋭い瞳で美智子と香織を眺めるだけで、怯みもせず静かに言い放った。

「悪いのは先輩。あの人はあたしを裏切った……」

切り刻まれた肖像画がひらひらと宙を舞う。

「あたしは先輩を信用してたのに…先輩は違ってた…そんなこと
ないって…それなのに…!!」

肖像画の最後の一片が床に落ちた。

09・AngerI失われたタカライ（後書き）

綾乃の過去その2でした。これが案外あとに繋がるはずですが…評価
& a m p ;感想お待ちします。

10・Memory消せないオトコ（前書き）

随分ご無沙汰です（＾3＾）ノ十一話をどうぞ

10・Memory消せないオトコ

16

「え……？」

美智子も香織も綾乃の言っていることが理解できないようだ。二人ともお互いの顔を交互に見比べ、きよとんとしている。

「……………」

当の本人は何やら悔しそうに唇を噛むと、俯いてしまった。教室に不透明な時間が流れる。

17

今から四年前、綾乃が中学三年生だったころ一つの事件が彼女の周りで起きた。

悪質ないやがらせ……………

ある1人の人間を対象にいやがらせは実行された。
その1人の人間は彼女の友人だった。

……………止めて!!……………

彼女の脳裏には友人を傷つけた加害者の顔がしっかりと刻み込まれている。
痛めつけ、苦しめ、そして死に追いやろうとした犯人。それでも笑顔をやさなかつた犯人。

それが…

――ミハ…アキヒロ…――

綾乃の目の前には純血した瞳の美葉が立っていた。真っ赤な血に染まったナイフを持って。
その顔は奇妙に歪み、悦楽を弄んでいるようだった。

『あやちゃんを返してよ…』

喜界な笑みを浮かべ、じりじりと綾乃に近寄ってくる。

『ねえ。あやちゃんを返してよ』

真っ赤なナイフを片手に添えて不釣り合いな喜びの笑みを浮かべて。

『君が悪いんだろう？』

美葉は綾乃を見ていない。

綾乃が抱き抱えている少年を突き刺さるような眼差しで見つめている。

『答えるよ…君が変な探偵ゲームを始めたからあやちゃんが部活に来れなくなっただんどう？』

なあ？そうだろう？』

真つ暗な裏庭で美葉の声がこだまする。

ナイフがギラつく。ナイフは月明かりに照らされて、美しい光を奏でる。

綾乃はただただ恐くて、抱き抱えた少年を離さないように一歩ずつ後ずさりした。

『答えるよ…それでもまだ俺の言うことが聞けないのか？』

少年からは滴るほどの血液を流れ、微かな吐息が聞こえるだけだった。

『答えるよ』

美葉はまた歩幅を進めて、綾乃に近づく。

『答えるよ』

また近寄って、距離が縮まる。

『答えるよ』

そしてまた一歩。

『答えるよ』

また一歩。

『答えるよ』

またいつ…

「止めて…止めて止めて…」

近寄ってくる美葉が恐くて抱き抱えている少年の体温が下がっているのが恐くて綾乃は悲鳴を上げた。真つ青な頬には涙が伝っていた。

「せんぱい…止めて…」

少年の呼吸が弱くなる。体温もどんどん下がっていく。さっきまで繋いでたはずの手が今はもう力なく垂れ下がっている。

「お願いせんぱい…」

『答えろよ答えろよ答えろよ…』

綾乃の言葉に容赦なく美葉は近寄ってくる。瞳に殺意が映っている。

「せんぱい…おねがい…」

『答えるよ答えるよ答えるよ答えるよ答えるよ答えるよ……』

「瑞ノ江を殺さないで」

あと一歩…

「私の好きな人を……殺さないで……」

『……………』

その瞬間、美葉はがっくりと膝をつき倒れ込んだ。手元にあったナイフは離れ鈍い光を放つ。

『…あや…ちゃん…』

闇に怯える子供のように体を小刻みに揺らして、焦点の合わない瞳を綾乃に向ける。

『ぼくは…君がだいすきだよ…』

そして音もなく泣き出した。

10・Memory消せないオトコ（後書き）

いやあ…途中でフケわかんなくなってしまったら、ごめんなさい！
感想&mp・評価お待ちしてます（*^^*）

11・Feeling—彼女のナミダ—（前書き）

とうとう12話…！だいぶ主旨がずれてますが、どうにかなるでし
ょ…（^ ^）（^ ^）

11・Feeling—彼女のナミダ—

18

——あや…ちゃん…ぼくは君がだいすきだよ…——

「みずのえ…みずのえ…」

瞳から溢れる涙を拭い、懸命に彼の名を呼ぶ。呼びながら震える指で携帯に番号を入れ、ショートしそうな頭を必死に奮い立たせて警察に連絡を入れた。

「助けてください…友達が…友達が…死にそうなんです…」

そして泣き崩れる美葉を片隅に、彼女はぎゅっと瑞ノ江を抱きしめた。

「死なないで…お願い…」

19

その後のことを綾乃はほとんど覚えていない。

恐ろしくて恐ろしくて、その場に座り込んでしまったのだ。

目が覚めたときには病院で、回りには不安げな顔をした警察や教師、友達が自分を見つめていた。

「えっ…？」

警察に発見されたとき彼女は動転していて、彼を離さなかったとい
う。

強く抱きしめて泣き崩れていた。

「――殺さないで…――」

「――連れて行かないで…――」

――私を置いていかないで……

何度も何度も同じことを呟き、怯えた眼差しを警察に向けて彼を抱きしめていた。

いくら警察が説得しても彼を離さない。時と共に彼の呼吸は衰退していく……

業を煮やした警察は彼女に軽い麻酔剤を飲ませ、彼と共に病院に運んだ。

そのため目覚めたとき彼女は病院のベッドの上で横たわっていたわけだ。

それから被害者の瑞ノ江は軽い手術を受け、順調に回復していった。2ヶ月学校を休学したが、学校側が「急な留学」とし、生徒に不信感を抱かれることはなかった。

加害者の美葉は事情聴取のため警察に連行され、三年間少年院で過ごした。

本来ならば世間に公表されるべき事件であったが、弁護士である美葉の両親と被害者である瑞ノ江の強い要望により、この事件は闇に葬られていった。もちろん生徒には瑞ノ江同様、

「急な留学」と伝えられ瑞ノ江、綾乃、学校関係者以外誰もこの事件について知る者はいなかった。

――なんで……美葉先輩を守ったの……？――

瑞ノ江が回復してから綾乃は恐る恐るこんなことを問いただした。

――美葉の将来がなくなるだろ？――

問いたただす綾乃に瑞ノ江はそう言って微笑み、これでいいのだとゆつくりと呟いた。

最後に。

綾乃は退院してから、所属していた美術部を辞めた。つまり美葉との関わりを絶縁したのだ。

――先輩：私は先輩が大嫌いです……

一粒の涙がぽとりと落ちた。

11・Feelingsー彼女のナミダー（後書き）

あゝあ…多々文の繋がりが可笑しいですね…素人なんで許してください^|^・感想&評価お待ちしております。

12・Action―二人のカンケイ―(前書き)

13話です¥(^|^)(^|^)(^|^)/ 最近は話の内容よりサブ
タイトルに困ってしまう積み木です(笑)

12・Action―二人のカンケイ―

20

「あや…?」

美智子と香織を目の前にして、先ほどから綾乃は俯いたまま顔を上げようとしない。拳は強く握られて、体は微かに震えている。

「あやっ…どうしたの…?」

美智子の声は不安げだ。

先輩の絵を破り…

先輩を罵り…

そして今は俯いたまま顔を上げない友達…

彼女はこんな残酷なことをする子じゃないのに…

一体なぜ…?」

美智子の頭は疑問でいっぱいだった。

21

「つまり…君はこの写真と『ナコさん』という噂が関係していると考えているのだね…？」

「ここは理事長室。」

瑞ノ江が理事長に噂と悪戯について説明している最中だった。

「はい。根拠はありませんが、そんな気がするんです。」

瑞ノ江は真っ直ぐに理事長を見て、静かに答えた。

「なるほど…ではまた何か詳しく判ったら、話に聞いてくれ。この話を元に私達も会議を開き、検討してみる。」

「判りました。では、失礼します。」

瑞ノ江はゆっくりと腰を上げ、大きな扉に近寄る。

頭の中は次の行動計画でいっぱい、緊張と不安が彼を支配していた。

「…一也」

瑞ノ江が扉を開けようとしたときだった。突然理事長が彼の名を呼び、彼は立ち止まった。理事長は広い机に頬杖をつき、瞼を閉じている。

「くれぐれも軽率な行動は取らないように。おまえのその行動が誰かを傷つけ、痛めつける可能性があることを忘れてはならない。」

「……………」

「私は一也を信用している。文無月さんも生徒会役員も。だが、いつ誰が傷つき悲惨な行動を起こすかは誰にも判らない。何が原因で最悪の結果を招くかは判らない。だから、決して忘れてはならない。……………あの日のことを。」

ゆっくりと瞳を開く。

また彼も瑞ノ江と同じように真っ直ぐに彼を見つめた。

「……………彼女の涙を……………」

「……………はい。」

瑞ノ江はまた静かに頷くと扉を開き、理事長室を後にした。彼は全速力で北校舎に走っていった。

12・Actioner二人のカンケイ（後書き）

やあーとっ次へ動き出しました。ちよつと過去に時間をかけすぎたかなあ… この話でまた謎点ていじつぷなわからんが増えましたが、そのうち判るはずですよ（オイッ！）アバウトな作者ですいません。感想&a mp；評価お待ちします！

13・TELEPHONE―少女の声―(前書き)

またまた話がそれまして…どうなっていくのやら^^^ ;

13・Telephone—少女の声—

22

ルルルル…

ルルルル…

無機質な音が部屋に響く。機械的に刻まれた単調なリズム。それが真つ暗な部屋に幾度となく響いている。

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

もう何度電話がかかって来ただろう。相手の判らない声のしない電話。初めはただの間違い電話だと思っていた。受話器に出ても声がしないし、そう頻繁にかかってくる訳でもないし。

- きつとよく似た番号の人にかけてようとしてるんだ -

そんな風に思っていた。

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

それなのに………

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

電話は鳴り止まない。

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

それどころか頻度を増してかかって来るようになった。

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

微かに光を発して、静寂を切り裂き続ける。私の体は音共にガクガクと震える。

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

ルルルル…

「…っ…っ…っ…っ…」

そして、震える体に同調するかのように留守番電話になった。

『……はい。只今留守にしております。』

電話の方はピーーという音の後に名前とご用件をお話してください。

FAXの方はそのまま送信してください。』

ピーー…。

『…っぬ』

男のような低い声が静かに流れる。

『…っぬ…』

その声に感情はない。

『守りを破った者は1ヶ月以内に死ぬ』

そして、嘲笑うような笑い声…

早く…早く…切れ…て…

怖い…怖い…い…よお…

もう何度となく聞いたこの電話。それなのに私は怖くて怖くて部屋の片隅で震えることしか出来ない。

「……………っ……………っ……………」

助けて…

誰か…助けて……………

私の願いとは裏腹にまた電話は光を発した。

ルルルル…

ルルルル…

13・TELEPHONEー少女の声ー(後書き)

いちおーこれは海南子ちゃんの話のつもりです^|^; 脱線し
まくりですが、頑張りますー!! 評価&mp;感想お願いします。

14・Strategy1ー甘いワナー(前書き)

久々ですー。

14・Strategy―甘いワナ―

23

「で、2人はどうしたわけ？」

目の前に困り顔の長篠紘司。

「や。別に……。」

その目の前に罰の悪そうな瑞ノ江と綾乃。

生徒会室で日下部が説明をしている最中に、いきなり瑞ノ江が綾乃を連れて戻ってきた。

何がなんだか訳の判らない長篠は取りあえず二人を椅子に座らせた。二人は大人しく椅子に座り、瑞ノ江が一言彼に告げた。

「聞き込み失敗」

それもそのはず、

瑞ノ江が美術室にたどり着いた時、そこには異様な空気が流れていて、調査どころではなかった。

立ちすくむ綾乃と

呆然とする美術部員。

彼はそれら二つの收拾をつけるため、現状を聞き、事実とでたらめを混同させて話した。

『文無月の友人が美葉に虐められていた。

だから彼女は美葉を恨んでいる。そのためこんな行動をとってしまった。』

そして、逃げるように綾乃を連れて生徒会室に戻ってきたのだ。

「失敗って…？」

里奈が思案しながら問いただした。

「話、聞いてるから。

進めて。あとで話すから」

瑞ノ江の言葉通り

そのまま日下部の説明が再開された。

24

「判った。つまり写真の特徴は人物、文字、場所ってことだね？」

柳川がぴりぴりしながら、日下部に言った。

「ええ。要約すればそんな感じですよ。」

「了解。」

それじゃ、僕は行くよ。

海南子が心配だから。

依頼、よろしくね。」

くるりと椅子に背を向けて、
立ち上がった。

「待ってください。」

瑞ノ江が声をかけた。

「俺の話も聞いて頂けますか？」

あなたにお願いしたいことがあるんです。」

柳川は眉をひそめて、
首をかしげた。

「……いいだろう。
なんだい？」

「海南子さんに学園を
辞めてもらえますか？」

「なっ！」

「罌をけけましよう、
解らないように。」

にやりと口元を歪めて
せせらつように呟いた。

14・Strategy1ー甘いワナー（後書き）

また動かせました（笑）

結局、いつも瑞ノ江で始まるんで

すよね（笑）

評価&mp;感想お待ちしています。

15・Strategy―甘いワナ2―(前書き)

また中途半端な書き方ですいません(< | >)

「何言つてんだっ
ふざけんなっ」

「落ち着いてください。
真面目な話ですから」

瑞ノ江は柳川を横目に
立ち上がると、

全員を見渡せる真つ正面の椅子に座った。

「聞き込みをして判ったことがあるんです。
だから罖をかけましょう、犯人に。」

一同、呆然とした。
何を言っているのか
理解できない。

頭が可笑しくなったのか？瑞ノ江一也は。

「何が判つたんだ？」

「今から全部話す。
だからそう、怒るなよ、
長篠コージくん」

くくくと微かに笑うと、
小さな紙切れを取り出した。

「これは美術室で見つけたものだ。
清水美智子のパレットの隅に置いてあった。」

「えっ…」

今まで黙っていた綾乃が
驚いて、声を漏らした。

「だって…
美術室には…」

…私のせいでいらなかったでしょ…？…

「俺だぜ？文無月。
ちよつといりゃあ気づく。」

で、この絵には気になるもんが描いてあったんで、借りて来た」
事実を言わせてもらえば、盗んで来たのである。

『生徒会長なのに…』
という突っ込みはこのさいお手柔らかにして頂きたい…。

「見てくれ。
イタズラ写真にそっくりだろ？」

確かにそこには

少女と校舎らしき建物、
それに

「メッセ」と書かれた隣にアルファベットが描いてあった。
まるで

イタズラ写真の下書きの
ようなものだった。

「本当ね…だけどなぜ…？」

「わかんねえ。」

だから近藤にこれを調べてほしい。」

疑問をぶつけた後に

いきなり依頼…。

里奈はきよとんと瞳を落とした。

「あつあたしが…？」

「そうだ。」

お前にこれを調べてもらう。」

「まっ待ちなさいよ。」

なんであたしが？

綾でも、コージでも

いいじゃない。」

「駄目だ。」

お前にやってもらう。

女子がヤバいもん持ってて男子に話すか？

話すわけねえーだろ。

文無月は美術室で

ちよつとやらかしたから、調べられない。

つうーか美術室、立ち入り禁止！」

早口で捲し立てる瑞ノ江に里奈は何も言えなかった。

15・Strategy―甘いワナ2―（後書き）

たくさん方が読んでくださって、作者は嬉しい限りです。これから
もお願い致します！感想&mp;評価お待ちしております。

16・Strategyー甘いワナー（前書き）

久々投稿です（*^^*）

「さて。」

では、本題に戻りましょう。」

「ちよっ…瑞ノ江一也!!」

里奈を黙殺し、瑞ノ江はさらさらと話を進めて行く。

「俺が思うに、ナコさんとこの写真は同じ人間が始めたことだろう」

「なぜ…?」

綾乃が不思議そうに瞳を動かす。

その隣では真っ赤な顔をした柳川が怒りをあらわにしている。

「簡単な推測だ。」

ナコさんと写真が噂され始めた時期が近いし、なぜか女子にだけ噂されている。

つまり女子を媒介にして、誰かが目的を持って行っていると考えられる。

それに決定的な証拠がある。」

「なに?」

「清水美智子だ。」

「えっ……」

一瞬、綾乃の顔が凍りついた。
瑞ノ江はそれを見逃さない。

「彼女はさっきの紙の他にナコさんの噂をいち早くクラスメイトに話していたそうだ。」

それも詳しく、簡潔に。

まだ誰も話していない時期に、彼女はナコさんを知っていた。」

「可笑しいだろう？」瑞ノ江は言いながら首を傾げ、綾乃の様子を伺う。

綾乃は瑞ノ江を避けるように、瞳を反らした。

「たぶん彼女は深く、この件にし関わっているはずだ。
文無月はそれを知ってるんだらう？」

でも、お前は優しいから話さない。そうだらう？」

綾乃は口を閉ざし、下を向いたまま顔を上げない。

たぶん文無月は何か知っている……ハルが言っていた事が本当なら、

彼女は、はめられている。

それにこれが当てはまれば、彼女が苦手な美術実にいち早く向かったことにも説明がつく…。

やはり全ての元凶は清水美智子なのか…？

瑞ノ江はそんなことを思いながら、彼女を見つめた。

「おいっ！

海南子について早く話せ！」

我慢の限界に達したのか、柳川が口を挟んだ。
他のメンバーは呆れたように彼を見た。

「判ってます。

みな静かに聞いているんですから、少し黙ってください」

「うっ…」

瑞ノ江の鋭い一喝に、柳川は黙り込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3551e/>

Holmes x Holmes

2010年10月14日00時56分発行